



無痛分娩について

～「安全で快適な分娩を」～



▶はじめに

妊娠おめでとうございます。もうすぐ赤ちゃんに会えるという期待と喜びと共に、出産に対する不安を抱えいらっしゃる方も多いかと思います。その中で「痛み」は大きな関心事ではないでしょうか。ここでご紹介する無痛分娩はスムーズな出産を可能にするだけでなく、様々な持病のある方にも安全な出産の一助となるものです。「安全で快適な分娩」のために、皆様をサポートしていきたいと思っております。

▶痛みを我慢する必要はありません

アメリカでは 1999 年に麻酔科と産婦人科の学会が共同声明を出しました。「陣痛は多くの女性にとって耐え難い痛みです。しかし医学的処置により安全に和らげることが可能であり、このような激しい痛みに耐えることを妊婦に強要することは決して許されません。医学的に危険がない限り、痛みを取ってほしいという妊婦のリクエストは無痛分娩の正当な医学的適応です。」

▶出産の痛みは必要ではないのですか

「産みの苦しみを乗り越えてこそ、母と子の絆が生まれる」という日本独自の文化があります。現在 5 人に 1 人の赤ちゃんが帝王切開で生まれています。そのお母さんや、痛みを感じずに親になるお父さんにも、子どもとの絆は生まれます。現在では 10 組に 1 組のカップルが不妊症で治療をしているなど、様々な思いを乗り越えての出産ですので、その喜びは陣痛の有無には関係ありません。

▶無痛分娩とその方法

出産のときに痛みを和らげる分娩です

お母さんが自分の力でいきめるよう、お薬の調整をします

背中から痛み止めの注射をします

眠くなることはありません

痛みをゼロにすることが目的ではありません。

硬膜外麻酔という方法が基本です。脊髄のまわりに細い管を入れ、薬を入れて、下半身の感覚を鈍くします。

脊髄くも膜下麻酔(CSEA)を状況によって追加します。陣痛が強くなった時に薬を始め、出産まで続けます。



▶出産に影響はありますが、大きな問題となることはありませんか

- 陣痛促進剤を使うことが多くなります。体から分泌されているホルモンと同じ成分なので、注意して使えば危険な事はまずありません。
- 分娩時間が全体で約 1 時間延長します。初産婦で約 15 ～ 30 時間、経産婦ではその半分の時間で出産するのが普通ですので、1 時間は大きな問題になりません。
- 帝王切開の割合は増えませんが、鉗子・吸引分娩の割合は通常分娩の約 2 倍になります。

- 現在の局所麻酔薬が主体の無痛分娩では、使用する薬が非常に少なく、赤ちゃんに何らかの影響を与える心配はまずありません。
- 麻酔の合併症は、頭痛（1%）、発熱（10%）、かゆみ（50%）、腰痛、排尿障害、神経障害・出血・感染（数～数十万人に一人）です。

▶どうすれば受けられますか？

- 興味がある方は、産婦人科医にご相談ください。
- 過去の病気・出産の経過・採血結果などを確認し、準備を始めます。
- 方法や流れなどを説明していきます。
- 出産に対するイメージを伺い、実際の出産とのギャップがあれば最小限にしていきたいと思います。
- 無痛分娩時の麻酔薬の効き方は個人差があり、その効果は異なります。また、処置のタイミングによっては、痛みを和らげる満足な効果を期待できない場合があります。処置後の無痛に関する費用は返金できかねますので、予めご了承ください。なお、無痛にかかる費用は自費となります。



▶無痛分娩に関する説明動画をぜひご覧ください

成城木下病院の無痛分娩について-1



成城木下病院 Seijo Kinoshita Hospital

当院の院長が、硬膜外麻酔のしくみから無痛分娩のメリット・デメリット、経膣分娩との違いなどを説明しています。

成城木下病院の無痛分娩について-2



成城木下病院 Seijo Kinoshita Hospital

麻酔はいつ入れる？飲んだり食べたりできる？といった皆さんからの質問をもとに、分娩室の様子なども交えてわかりやすくご説明いたします。

【無痛分娩をお考えのみなさまへ】全編



東京都福祉局

妊婦の皆様が自らの出産方法を安心して選択できるよう、東京都が作成した動画です。分娩の流れ、硬膜外鎮痛法を用いた無痛分娩の特徴やリスク等を盛り込んでいます。産婦人科と麻酔科の2部構成で分かりやすく説明しています。

東京都福祉局ホームページの下部に動画があります ↑